

新刊紹介

李 素楨著

『日本人を対象とした旧「満洲」中国語検定試験の研究』 (文化書房博文社、2013年7月10日刊 309頁、¥5800)

吉林華橋外国語学院客員教授 田中慎也

本書の研究課題は、著者が序章で述べているが、「旧「満洲」居住の日本人を対象とした中国語教育の一環としての検定試験をめぐる様々な事実とその歴史的展開に着目し、その検定試験にどのような理念が与えられ、どのような制度が構成されたのか、どこまで実行されたのか、どの機関により組織され、どのような人物が中心となったのか、受験者の合格率や試験の内容を研究し、さらに検定試験の成立と展開の歴史を総合的に考察し、その実態」を、1904年の日露戦争から、1945年の日本の敗戦による「満洲国」解体までの40年間の歴史の中で考察したものである。

本書成立のユニークな視点は、1980年代から始まった中国の旧「満洲」における日本の植民地教育研究が、多くの現地人に対する植民地主義者の「奴隷化教育」という一面的な視点から脱却し、満洲国時代に一部の在満日本人に対して半強制的利益誘導式の中国語教育（当時の呼び名は満語、支邦語、華語）が行なわれていたことに注目して、これを「誘制式言語教育」と名付けたこと。そして日本の「満洲」侵略を正当化する言語政策を、戦車の両輪のように、一方で、民族を滅亡に導く侵略手段の一つとして現地人に日本語を強制する政策を行い、他方で、「日本の生命線」としての「満洲国」を確保する手段として、一部の日本人に半強制的利益誘導的な中国語教育を行なったとした点である。

本書の論文内容を審査された主任審査委員の植田渥雄桜美林大学名誉教授は、まえがきの中で、同じく審査委員を務められた故衛藤藩吉東京大学名誉教授の審査会でのご発言をおおむね以下のように纏められている；第一に膨大で貴重な資料を収集された点、第二は、李先生が立派な日本語で書かれた点、第三は、長年にわたって物質的な誘惑に負けることなく、ひたむきに勉強され、実証的に議論を進め、事実により議論を守り抜いたという点を高く評価する、との三点であるが、このご発言自体がいかにも本書が貴重で内容の濃い研究書であるかを実証しているといえよう。今後の「満洲

研究]、「満州国言語政策史研究」に資すること大なる書であり、関係各位にご推薦申し上げる次第である。

本書の構成は次の通りである。

序章

第1章 中国語検定試験の成立と展開

第2章 中国語検定試験の規程、方法及びその合格率

第3章 中国語検定試験の内容及び言語の特徴

第4章 雑誌『善隣』に見る検定試験の実態

終章

各種の表

付録

参考文献